

に及ばぬとも言ひ得るであらう。(4)又簡単な文法を巻末附録として載せられたら一層便利であつたと思ふのは、筆者のみの欲望でもないと思ふが、今日メルレンドルフ文典の覆印本を安易に入手し得る時、それに及ばなかつた事かと察せられる。(5)凡て譯字符號はメルレンドルフ文典によつたとは助編者の一人の話であるが、それがよいか悪いかは種々問題となる所あり、殊にその特殊子音の寫し方に筆者も一考を要すると思ふものがあるので、今回の業に之を論じて是正さるべき餘地あつたのではないかと考へる。然しメルレンドルフ文典は一般的に分り易く、暫くはそのまゝにされても別段咎むべき事でないとも云へよう。以上の如き諸點は本辭書を披閱する時何人も直に氣付く事であらうし、編者も十分承知の事と思ふが、編纂方針が既述の通りであつた以上格別論議するに及ばぬと思ふ。滿洲字を入れぬ爲に巻頭に別に文字表を附せられある事、語彙の配列がローマ字順によつた事、譯語の精確な事、同類熟語を一個所に集められたる事等は使用者に多大の利便を與へる事であつて、此にも編纂者の隠れた苦勞努力の存する事を推賞したいのである。願くは今後これを土臺として更に廣く多方面に互つて語彙を蒐集しより完全な大辭典の完成出現されん事を期待して已まない。以上燕辭を連ねて紹介の辭とし、併せて羽田博士初め編纂者諸氏の勞苦を重ねて謝すると共に學界のこの書を讀たるを衷心祝福する。切に斯界好學の士の一本を備へられん事を祈つて筆を擱く次第である。

(菊判本文四百八十頁。定價五圓。京大滿蒙調査會刊並に發賣。

紹介

京都彙文堂、東京丸善書店取次販賣(爲淵)

### ○北米合衆國新地誌

楠田 鎮 雄 著

地理書の出版が未だ教科書・概論の類に止つてゐて、各國地誌が大いに要求される今日、老練の著者が合衆國の地誌を世に投せられたのは何を措いても喜ぶべきことであらう。

本書は『今一度エマーソンの言も、ロングフェローの詩も、はてはヘルコロンビヤの曲でさへ口誦んでみたい』といふ著者が一氣に筆を取つて極めて自由の立場で書いたといはれてゐるのであるから、この書を読む人は先づこの事を頭に入れておけば失望することはあるまい。多小通觀上の不便や地理學的分析があまり顧慮されてゐないとかいふ點は他の書について求められたらよい。

地體構造や地形について充分スペースが與へられてゐるのは、開拓の歴史、地名の解説と共に最も著しい特色をなしてゐる。土語に由來するものを始めオランダ・スペイン・イギリス以下諸國語より、又既存の地名・人名等より命名されたものが多く存して極めて錯雜してゐる合衆國では地名の由來意義を解説してゐるのは極めて適當であらう。各地出身の學者詩人政治家實業家等も必要に應じて潤に富んだ説述をしてゐる。

形式の整つてゐる代りに生硬で皮相的なものゝ多い中で、この地誌は著者の蘊蓄と流暢な文によつて讀者の手をとつて案内して

くれる底のものである。

目次

- 一、合衆國の發端
  - 二、自由の森
  - 三、中部アパラチヤ地方
  - 四、南大西洋諸州
  - 五、中央平原南部諸州
  - 六、中央平原北部諸州
  - 七、高原諸州
  - 八、太平洋諸州
  - 九、アラスカ
- 〔四六判、三〇五頁古今書院發行定價貳圓〕(野間)

O.H. Spethmann : Friedrich Marthe,  
ein vergessener Geograph.

Berlin 1935. S. 31.

忘れられた地理學者といふ標題に大仰なといふ反感を多少感じてはみたものゝ、やはり著者のこの仕事には大いに共感し感謝せねばなるまい。

マルテはベルリンの陸軍大學教授となつたが、所謂學界の名士ともならずむしろ伯林地學協會の歴史に、書記として記録されて

今日の人々の目に止るにすぎぬといへよう。

彼は一八七七年「地理學の概念・目標並にその方法とリヒトホーヘンの支那第一卷」―伯林地學協會雜誌第十二卷・四二二頁―四七八頁―及び「地理學に於けるカール・リッターの意義」―一八七九年―を發表したが、之が今日シュベートマンをして大仰に彼を發掘せしめる所以である。之等に於て彼は現代多數の地理學者特にリツケルトを借りて地理學を建設した人々のなし得た所を既に大綱に於て論じてゐた。地域學なる概念は彼が始めて論じたものであり又今日と雖も彼が與へ得た以上にこの概念には何等新しい内容は附加されてゐぬにも拘らず、彼はかつて論及されない。今日マルテを讀む人は現代多數の地理學者の論說にマルテそのまゝの思想文章を見出すにちがひない。そこで今日不當にマルテが看過されてをり、今日しばし論議されてゐることが既に遠くより鋭く解決されてゐたことを世に明にする必要を感じるだらう。だが同時に又マルテと同一思想が餘りに頻繁に現今繰返し論ぜられてゐる故に、彼の名は言及されぬだけで彼の議論は周知の事實ではなからうかと疑をおくであらう。こゝでハタと當惑する人にとつてはこの小冊子は誠に嬉しくも解決を與へてくれる。如何に多くの學者が彼のと同一の思想を殆ど類似の文章で以て表現してゐるかを一々列挙してみても興味がなくもないが面倒な仕事でもあるのでおく。

第一節に六頁を費して傳記を、第二節に彼の方法論の綱要を十五頁、第三節に十頁を費して地理學發展史に於ける彼の意義を論

じてある。第二節はもと／＼さう大量でないマルテの方法論的著作をかなり忠實に辿つてあるので、いはゞ反覆してあるので、にも一度シュベートマンの説述を抄してマルテの反覆を二重にするのは差ひかへておく。別に機會もあらう。

リッターの地理學の定義を説くに際して屢々物的充填なる語が引合に出されるが之が實はマルテの使用したものであることがシュベートマンの論述から判斷することが出来るのも少らず愉快である。リッターはイルディツシュなる語を用ひてゐるのみなのでこの間の事情に疑念が挿まれるからである。マルテは創造的な才をもつてゐたとシュベートマンは云つてゐるが、殊に造語といふ點に於ては極端にそれを發揮してゐる。彼の文章が少からず難解なもの一つには之が爲だらう。コロゲラマイ・コロ、ギ・コロソフイ・ジンコリスムス等々まだこの同一語根から作出した語があり、その他の種類に至つては列擧に堪へない。唯シュベートマンは「動的地誌」の著者であるが、これも語のみならず概念内容もマルテを受つてゐるものであることはかなり興味があることだ。何故マルテがかくの如くしてしかも後世に忘却されたかについてはリヒトホーヘンと奇妙な關係にあつたから、しい。リヒトホーヘンは今日の地理學者が大方直接にその系統をひいてゐるのだが、「支那第一卷」でもライプテツヒ大學就任演説でもマルテと覺しきものを指しながらその名を擧げてゐない。殊に彼の所説はマルテの影響を受けてゐることは疑もない事實でいはゞマルテを多小淺薄に誤謬多くしたものだといつてもよい。リヒトホーヘンは

もつと別の領域に本當の任務をもつてゐた人だからこの位に言つても別に彼に對して不當ではない。彼を現代地理の理論的部面の直接の父祖の様に取扱つてしまつた後人こそ不當なのであるから。その他のより重大な事實からマルテとリヒトホーヘンとの關係が妙なこぢれたものであつたらしいことを推論してゐるのあたりがシュベートマンの小著の一重點であらう。かくてマルテはリヒトホーヘンの巨大な名聲の蔭にかくれてしまつた。後人は誰もマルテまで溯らうとせぬが、リヒトホーヘンの功績のうち地誌學の建設は實はマルテの負ふべき名譽だつたのである。但しマルテの「地理學の概念目標並にその方法」とリヒトホーヘン「支那第一卷」なる論文は老大な「支那」についてよい紹介であることは斷つてをく。シュベートマンがマルテを擁出してゐた以上我々も彼を抹殺せぬ様注意せねばなるまい。マルテを取出したのは彼が自己の「動的地誌」の援兵とする爲だと考へるのは意地が悪すぎることだらうか。ついでのことにその他の不當に忘れられてゐる人々を發揮してほしい。さしあたりキルヒホフなどもその様な一人ではないか。(時價一二〇圓)(野間)

○Nicolas Berdyayev: The Meaning of History. (1936)

著者ニコラス・ビエルディアエフの名は、「ルネサンスの終末」(一九一九年)・「新しき中世」(一九二三年)等の論文を収めた「The End of Our Time」(佛語版・一九二七、英譯一九三三年)